

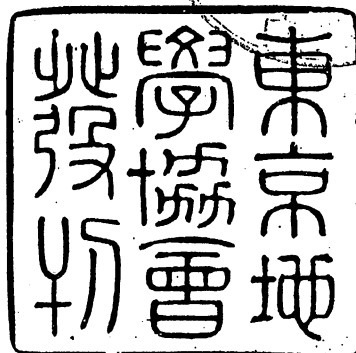
明治三十八年十月十五日發行
明治三十八年二月十三日第三種郵便物認可



地學雜誌

明治三十八年拾月
第十七卷第二百號

目	要
●アシア十四件 ●アフリカ一件 ●ヨーロッパ六件 ●南北アメリカ大洋州及兩極其他十二件	●鹿折及六黒見金山鑛床 理學博士 鈴木 敏
●例會及評議員會 ●東京地學協會記事 ●西藏探檢家寺本婉雅師の歸國	●樺太經營家としての近藤守重 理學士 小川 琢治
●第三十版硫黃列島及新硫黃島見取圖	●新硫黃島視察談(完結) 理學士 佐藤 傳藏
●第三十一版硫黃島地形圖及見取圖	●南船北馬(第二十三稿) 理學士 石井 八万次郎
●第三十二版「砂擦れ」したる火山噴出物	●竹島に關する舊記(完結) 田中 阿歌麻呂
●附圖	●瓦斯泉及泥火山 矢島 悅次郎



明治二十一年十二月十日內務省許可

西書を巡回せんとし、第二十三稿は、南京九江間の汽船中にて書き終れり、今後は起草の遠少なからんと思ふ、且つ湖南は江西と連続し、江西は福建と腹背をなす、故に江西巡回の後、湖南福建に關して、能く理會するを得ると思ふ、故に茲に、一旦筆を擱く、他日機を見て、第二十四稿以下を投稿せんとす。

清國の政治上のことは、東邦協會報告に、清國論を掲げたり、又續産物に關しては、續業會雜誌に投稿する積りなり、清國全体の地質に關しては、目下材料蒐集中なれば、急に調製し難き事情あり、余は暫時續稿を見合せて、新旅行をなさんとす、一年の長時日間、我親愛なる讀者が、余の拙文を見るの勢を執られたるを多謝す、

ほ地學協會が、余の拙稿に貴重なる紙面を貸されたることを深謝す、

明治三十八年四月十六日

南京九江間汽船吉和號にて 石井八万次郎

隱岐國竹島に關する舊記 (完結)

田中阿歌麻呂

竹島圖説 此島に甘露の瀧あり、また甘泉あるとを沙汰す。然れどもまた其實を亂さる故に爰に除く云々 實に是無比の奇島なり。又匏極めて太く、是を申匏にして産物とす。凡日本普く賞翫す。所謂匏を得ること多きが故に岸沚の竹を撈て、海中に沈め置き、朝に之を浮むに、技業に附く匏恰も生木子の如くなるとかや伯耆

此島に生ずる猫すべて、尾短く曲なりと云ふ。依て常にも曲尾なるを世人號して竹島猫とは稱するなり。多く是虎生のものといへり伯耆

- 鼠 ヒメネズミ 告天子 ヒメコノドリ 白頭翁 ヒメコノドリ 金翅鳥 ヒメコノドリ 白鳩鳥 ヒメコノドリ 鷓鴣 ヒメコノドリ 綉眼 ヒメコノドリ

燕 ヒメコノドリ 鷺 ヒメコノドリ 角鷹 ヒメコノドリ 鷹 ヒメコノドリ 穴鳥 ヒメコノドリ 此島岩燕かと思はる朝六ツ頃に岩崖を飛出して、其中に其穴を求めて之を獲ることありといへり。其色灰白にして宛も燕の如し。腹もまた白し。漁人ども名けて穴鳥といへり。竹の浦の西なる岩崖其餘處々の岩崖に多しと聞けり。

海驢 ヒメコノドリ 此魚肥前平戸

雜 錄 (隱岐國竹島に關する舊記)

雜 錄 (隱岐國竹島に關する舊記)

に「マレブイ」といふもの此魚ならん。其大さ小犬の如し。面は鱗魚の如く。極めて多脂なり。色白く質は蠟に似て、若し。人はを獵せば釜中に入れ、水を加て煮る時は、油氣沸騰して上面に浮ぶ。之を取り夫に水を加て煮る時は復始めの如し。又幾度も煮る時なし。是を以て若し流入獵せば、大に油を得るの利ある故好て獵せん。人參 薔薇の如し。ノコギリ細く堅花の如く。結香花此皮を以て雁皮を漉きま。芙蓉花 梅檀木 朱檀 黒檀共にありなり。色黄にして味甘辛なりといふ。タイタラ木の如し又梓 山茶 梅 大竹周り二尺ばかりのも

黄柏 葉は榎樹葉の如し。木色赤くして、葉 桐 楮 蒜 菜玉 薔花 大蒜 小蒜 枸骨 先手にたつなり。本邦の栢に似たり。 胡頹子 莓 虎杖 辰砂 欵冬 翼荷 土當歸 百合 午房 胡椒子 蒜 菜玉 薔花 大蒜 小蒜

岩緑青 等に類するものあり 何れも漁人の口牌に傳ふる筆記し置しなり。此岩緑青といへるものあるが是なる人と思はる。等は其あらましにして別して人參 鮑 鱧の三品を最も多しといへり。是其大要にして漁者賤民等もと持歸り置しならん。米子よりまた渡海の人此三品をいつも多く携へ歸りて、其余を持歸りしことはなかりしといへり。此一條金森建策が筆記よりとるなり。然るに世に此地をして荒鴻に比するを如何にも審かなりし

とやいわん。天度中正を得て、三十七八度に及び、東國關東八洲と況や海岸船舶をよするの地あり。樹木並巨竹を産し花卉草菜繁茂し、何も不毛とは謂がたかるべし。夫れ不毛といへるは樹木長せず、菜

草長せず、沙漠礫の地をして言ふなるべし。其生ずる處の竹周り二尺に及びて實に 本邦薩州大河平を除くの外他に比すべき地なし。樹木多く松を生し、是亦巨材を出さん。結香花山中に多きと聞

けり。此皮を剝て運用せば是亦他に類少なし。況や人參に於てをや。又島中大蒜野蒜を生ずるよし弘兼て三航蝦夷日誌にしるし。また佐渡日誌にも其考證を記し置り。今此處に贅せされども、此類を産

するの地、金、銅、銀、錫、鉛等の氣定めて多し。況や此島辰砂岩録青を産するに於てをや。開物者何ぞ是等

兼て三航蝦夷日誌にしるし。また佐渡日誌にも其考證を記し置り。今此處に贅せされども、此類を産するの地、金、銅、銀、錫、鉛等の氣定めて多し。況や此島辰砂岩録青を産するに於てをや。開物者何ぞ是等

の事を精せざらん。綠青は元來金銀銅の氣結でなり、辰砂は朱砂、錫水銀の氣あるが故に産するなり。我が用ゆる處は漁夫どものいひ傳ふると、好事家の筆したるものと、其餘彼是と島中の事を記したるものを集めて、一冊とするにして敢て航して記したるにあらざれば、此の餘品産に志を齎す人をして、此一島の事を探索せば國家の益何そ少なからん (完結)

瓦斯泉及び泥火山

矢 島 悦 治 郎

地學上の諸現象には吾人に不可思議と感ぜらるゝ者少からず、かの瓦斯泉 (Gas Springs) 及び泥火山 (Mud Volcanoes) も確かに其一なるべし。余は茲に其二者の概略を述べ且其原因に論究せんとす。抑も地球は星霧説の教ふる如く次第に地熱作用を減じつゝあるは事實なり、かの活火山は硫黄孔、蒸氣孔、炭酸孔等に變じ、遂に全く地質的跟跡のみを殘して休火山と變ずるを常とす。即活火山は亞硫酸及び格魯兒水素酸を噴き、硫氣孔は硫化水素、硫黄氣、亞硫酸等を噴出し、蒸氣孔は單に水蒸氣を出し、炭酸孔は主に炭酸瓦斯を噴出す。試みに箱根の大地獄に至らば、一溪悉く硫煙を以て被はれ、恰も火災後の惨景を見るが如し、これ昔時大活動を演じたる大涌谷大破裂の餘力を保つ硫氣孔に外ならず、余は其最も盛なるものに就き温度を測定したるに表面にて攝氏九十七七度、地下二呎許りの所にて攝氏九十八五度を得たり。此時余は雨後の事として噴煙甚しく多量の瓦斯を吸入したりと雖も何等の害を受けざりき、是に於て余は、硫煙濛々吾人を窒息せしめんとす云々の形容穩當を

地學雜誌第十七年第二百一號目次

論 說

●鹿折及六黒見金山鑛床……………理學博士 鈴木 敏六八〇
●樺太經營家としての近藤守重……………理學士 小川 琢治六八八
●小林房太郎……………

雜 錄

●南船北馬(第二十三稿)……………理學士 石井八万次郎七〇六
●竹島に關する舊記(完結)……………田中阿歌麻呂七四二

附 圖

●第三十版 硫黃列島及新硫黃島見取圖
●第三十一版 硫黃島地形圖及見取圖

東京地學協會記事

●例會及評議員會 ●西藏探險家寺本婉雅師の歸國

雜 報

●北海道樺太間海底電線開通
●北海道區制及一級町村制施行地人口
●白根山(上野)噴火口流水の潰決と其被害
●東京帝國大學構内小池の定常振動
●伊豆大島地震
●紀州名勝橋杭岩に就て
●瀧海火燒嶺位置新測改正
●本邦第一區域海岸區名稱の改稱
●韓國慶尙島境況

●韓國沿海及内河航行に關する條約
●江蘇省の無錫鐵道 潭開港
●岳陽湖南省常德湖 潭開港
●ペートル大帝山脈 潭開港
●セイロン島の新礦物富源
●サハラに於ける火山
●ラグエネ、フイヨルドの山崩
●伊國南部地震
●ストロンボリ及ヴェスヴィヨ兩火山噴火
●佛蘭西に於ける村是調査の一新案

●佛蘭西の運輸問題
●英國パインカムの大地震
●合衆國水産測量
●フリヂンコロロンビアの鑛業
●アラビヤ合衆國サンパウル州
●セネガスの島嶼の不定
●カリナ群島ボナヘ島新測量
●北太平洋の磁気測定計畫
●大西洋北東貿易風の研究
●アメリカ北極地方の氣温
●エレスメル地

●世界火山圖誌
●リットホーフエン氏の計畫
●第十九回文部省檢定簿試験問題(歴史科及礦物科)
●新刊紹介
●新著寄贈圖書目録
●正誤

●新硫黃島視察談(完結)……………理學士 佐藤 傳藏七〇〇

●瓦斯泉及泥火山……………矢島悅次郎七〇〇

●第三十二版 砂擦れしたる火山墳出物

東京地學協會

(明治十二年四月創立)

總裁

閑院宮

載仁親王殿下

會長

子爵

榎本武揚

副會長

男爵

花房義質

副會長

子爵

岡護美

主 理學士 伊木常誠

幹 農學士 志賀重昂

理學士 佐藤傳藏

監 荒井郁之助

事 理學士 山上萬次郎

名譽評議員

侯爵 鍋島直大

男爵 赤松則良

男爵 大鳥圭介

評議員

伯爵 桂太郎

子爵 曾我祐準

伯爵 井上馨

男爵 花房義質

子爵 榎本武揚

子爵 長岡護美

理學博士 橫山又次郎

理學博士 田中阿歌麻呂

理學博士 坪井正五郎

男爵 菊池大麓

理學博士 巨智部忠承

理學士 小川琢治

農學士 志賀重昂

理學士 佐藤傳藏

理學士 脇水鐵五郎

理學士 伊木常誠

理學士 和田維四郎

理學士 金原信泰

理學士 井上禧之助

編輯委員

理學士 田中阿歌麻呂

理學士 佐藤傳藏